

乳幼児結核に関する研究

著者	太田 瑞夫
号	95
発行年	1962
URL	http://hdl.handle.net/10097/17782

氏 名 おお 太 た みづ 瑞 お 夫

授 与 学 位 医 学 博 士

学 与 授 与 年 月 日 昭和37年3月7日

学位授与の根拠法規 学位規則第5条第2項

最 終 学 歴 昭和30年3月 弘前大学医学部卒業

学 位 論 文 題 目 乳幼児結核に関する研究

論文審査委員 東北大学教授 荒 川 雅 男

東北大学教授 中 村 隆

東北大学教授 岡 捨 己

太田瑞夫提出論文内容要旨

乳幼児期における結核感染の診断に関する臨床的実験的研究であり3篇より成る。

第1篇；結核感染初期における流血中の「ツベルクリン多糖体感作赤血球」の出現（家兎における実験）。成熟ならびに幼弱家兎の肺内に、経気道的に人型青山B株結核菌を感染せしめたとき、感染の初期において、流血中に、ツベルクリンにて感作された赤血球の出現をみると、間もなくこれは証明されなくなる。この時期にては血清中に該結核菌に対する抗体が出現してくることを明かにしたものである。流血中ツベルクリン感作赤血球の証明には、青山B株静注反復した山羊抗血清を用い、また家兎の結核菌に対する抗体の測定には Middlebrook and Dubos の法に従い、ツベルクリン感作人O型赤血球との凝集反応を用いた。

第2篇；人血液に添加したツベルクリン多糖体の人血球への吸着。人全血にツベルクリン多糖体（戸田法により青山B株培地より作製）を加える場合には、その血清中に存在するツベルクリンへの抗体にまづ吸着結合し、前者が少量の場合には、残余のツベルクリン多糖体は赤血球に吸着されることを明かにした。

第3篇；小児流血中のツベルクリン多糖体感作赤血球の存在（小児期殊に乳幼児の結核感染診断への応用）。13才以下の小児で食欲不振、嘔吐、下痢などを訴えて来院したもので結核感染を否定できない278名について、流血中のツベルクリン感作赤血球、血清中結核菌抗体、ツベルクリン皮フ反応、胸部X線検査などを行つた結果、これらの中89例（32%）に流血中ツベルクリン感作赤血球の存在を証明し、この頻度は7才以下殊に3才以下のものに高い。またこれらツベルクリン多糖体で感作された赤血球が流血中に見出された例のうち7才以下のものではツベルクリン皮内反応陽性のものは高く37%であり、換言すれば63%は2,000倍ツベルクリン皮内反応陰性であることを示している。従つて、流血中のツベルクリン感作赤血球の証明は乳幼児における結核感作の存在を皮内ツベルクリン反応（2,000倍）陰性のときにも検出される可能性を示している。

審 査 結 果 の 要 旨

乳幼児結核の診断に於て、ツベルクリン反応が完全に陽転しないとき、すなわち疑陽性または陰性に止るとき、臨床の実際における診断は困難であり、これは化学療法剤の進歩した現在では早期治療を実施する上からも大きい問題であると思われる。

本篇は未だ多数の結核患者の存在する青森県において、乳幼児の結核の感染を早期に診断するために行つた実験的臨床的研究であり3篇より成る。

第1篇においては家兎に経気道的に青山B株を注入するとき、早期に流血中にツベルクリン多糖体にて感作された赤血球が存在すること、そして流血中にツベルクリンに対する抗体が発生する時期になると前者は証明されなくなることを証明している。

第2篇では人血液にツベルクリン多糖体を添加したとき、そこにツベルクリンに対する抗体が存在しているときには、ツベルクリン多糖体はこの抗体と結合する。この際もし、ツベルクリンに対する抗体が存在しないときには赤血球に結合することを明かにしている。

第3篇においては、結核の感染を疑わしむる乳幼児278例について、流血中のツベルクリン多糖体感作赤血球の存在を檢したところ89例(32%)にこれを証明した。ことに7才以下の小児で、流血中にツベルクリン感作赤血球の存在を証明した74例中ツベルクリン皮内反応(2000倍旧ツベルクリン使用)陽性のものはその34%にすぎないことを示している。

以上の成績は、結核感染があつても抗体産生の不良なる地区乳幼児において、皮内ツベルクリン陰性の際、著者の方法は診断的価値を有するものかと思われよう。